青森市町会連合会事務局発行
事務局だより
83号
57・6

昭和五十七年度定時総会終わる

4/30

出席者　二五〇名　　於　青森県商工会館

来賓として、工藤青森市長、落合市議会議長、福士青森警察署長、島東北電力営業所長等臨席、議長には出席会員より入間正輔氏が選任された。

議事に入り、特別、問題になる案件もなかったので、予定通り二時すぎ終了。

役員は従前通り全員再任、補欠監事一名は松森町会長木村重蔵氏が選任された。（工藤四郎吉氏の後任）　総会終了後直ちに懇親会に移る。

今回、来賓工藤青森市長の祝辞の中で、町内会にかかわる次のような内容にふれ、注目を集めた。

㈠　街灯電気料補助基準を従来の最低五〇パーセントを五十七年度より六〇パーセントにアップした。

㈡　町会活動助成のため、単位町会ならびに地区連合町会に対し助成を考えている。

できれば、九月の補正予算で実施したいと、現在の町会活動に対し、従来になかった積極的な姿勢を打出した。未だ具体的に煮詰ってはいないが、九月朗報として期待できるものと思う。活動しない連合町会には勿論助成されない。素晴らしい活動をしている地区もある反面、中には冬眠地区もある。この機会にバッチリ目をひらいてほしいものである。環境整備の充実している中部地区でも、事業所ゴミの有料化、駅前ポン引き公害、交通事故防止パレード、市政懇談会、ゴミへのモラル向上のための梨ノ木センター見学等、周辺への認識を深めて、問題意識をつよめてほしいものである。

○　出席者からの質疑

●　各部活動は予算を余しているが、活動しているのか。

▲　事業報告にあるとおり活動している。その経費は研修費、予備費等の関連でみてほしい。

●　三十周年記念事業の計画はどうなっているか。

▲　まだ具体化していない。但し、寄付、広告にたよらず、できるだけ斡旋品収益の積立てによって経費をうみ出したい。

●　その他、決算書の印刷ミスの指摘・人件費の増額を考えよ等。

（▲印は事務局側の答弁）

西部第七区を新設

西部第七区は、地区連合町会としては最大の二五町会で組織されていたが、地域的に広すぎ、不便も多いので、次の七町会は分れて、第七区連合町会を設置した。

会長には、江渡中町会長の川口要作氏が選出された。

石神町会、江渡上町会、むつみ町会、江渡中町会
江渡下町会、岡部町会、みよしの町会

これで、青森市内は三十三地区連合町会になる。

伸言　町連

冠婚葬祭の合理化

～～～～～～ 浸透は上から下へ　～～～～～～～
～～～～～～～ グループから個人へ　～～～

冠婚

お互い必要を感じながらミエに、まどい、ムリとムダから逃げきれない人が多い。近頃の結婚披露宴など、テレビでみる中央のタレント並みである。

当人・両親にとっては一世一代の盛儀ではあろうが、お色直しも四回では疲れるばかりだろう。この日だけは、新郎は秀才、新婦は才媛になる。何か白々しい。最後は、雨もふらぬのに相合傘とくる。これらはすべて業者のきめた規定のセットで運営される。主催側はそれでよいとしても招かれる方は大変である。呼ぶ方は一生一回でも、呼ばれる方は、今月はこれで五回目だという人もある。

現職をしりぞいた年金生活者は、ガクンと収入が減っても交際費はあまり減らないのが普通である。

毎回同じような猿芝居をみせられて高い料金を支払わされてはたまらない。これが合理化は、上の方つまり、知名度の高い者、指導者クラス「長」のつく者が率先して実施するか、職場、団体で自主的にきめるより方法がないように思う。業者計画にのらず、主体的に心に残るような披露宴を考えたいものである。

葬祭

歴史小説作家司馬遼太郎氏は、文芸春秋四月号「日本仏教と迷信産業」の題で、日本仏教は中国経由の仏教だから漢字表現でやってきた。つまり坊さんは中国人だから中国の名前である。そこで日本でも坊さんになることは中国の名前になることだ。最澄、空海、道鏡とか。坊主が葬式を主導するようになったのは、室町時代頃からだ。東大寺、興福寺の官僧は今日も葬式をしません。

俗人が死んだらこれは僧になったということで、中国の名前をつけた。これを戒名といったわけです。戒名は極楽往生の呪力ということまでなった。本来の仏教には絶対呪術性はない。

わざわざ生れもつかぬ中国の名前をつけられて、それも金をとるため院、院殿、大居士などつける。お釈迦様とは全く関係ないことである。いまは迷信さえ商品になる時代である。この様子ではいつか日本仏教も絶えてしまいます。

墓碑銘

・故十三森町会長柿崎酉松殿、四月二十二日歿

若い頃から町会議員、市会議員と議員歴も長く、退任後も町会長として用件で町へ出てきた際は当事務所へより持参の弁当をひらく。帰りはよく松木屋へよる。デパートのマネキンをみていると若返るのだという。なる程、こんな若返り法もあるのかと感心。酒脱な冗談で人を和やかにし、元気だったが、最近さっぱり姿をみせないと思っていたら、今回の赴報。若い老人も八十四年目のガンには逐いに勝てなかった。

合掌

泥けむりかすか田螺の恋があり　　かつお